

今日のプロテスタント教会：礼拝における説教

法学部 天野 武男

I 初めに

クリスチャンとしてイエスを主と信じるものが、週の初めの日には教会での礼拝を守ることは当然である。なぜ当然であるのかという自明の問いに自明の答えがあると一般に思われているが、その当然であるという答えをもう一度再確認するために、小論文をまとめて、今日のプロテスタント教会での礼拝における説教の意味、意義を考えてみることを目的とする。

II 礼拝の歴史：礼拝は「霊とまことをもってする礼拝」（ヨハネ4：24）

礼拝は人々が神を知った時から始まるのではなく、神が人を造られる前に礼拝が準備されていたと考えるべきである。なぜなら神は神自身が現わされていることをあきらかにすることで礼拝が成り立つからである。つまり、恵みによって造られた人間が天地創造の神を、霊とまことをもって、毎日、自分の場所において讃美することである。ではこの礼拝はどのように守られてきたかを簡単に振り返ってみることにする。

1) 旧約時代

旧約聖書のヘブル語「カーハール」は「集まる」を意味し、「神との出会い」を「神の民」が経験してきたといえる。イスラエルの先祖であるアブラハム、イサク、ヤコブが出会った神との対話は、「神ご自身の表れ」「召命」「決断と服従」「罪の告白と赦し」「御旨の告知」「祝福の約束」「信頼の告白」「感謝と献身」「使命への旅たち」などをアブラハムとその子孫にもたらし¹⁾。この出会いはモリヤの上や、マムレの檜の木の下であり、ヤボクの川や、旅をする土地土地の出来事であり、旅をする途上での礼拝と考えてよい。これがモーゼの「幕屋」であった²⁾。

遊牧民時代が終わると、ダビデによってイスラエル統一国家となり、BC949年ごろエルサレム神殿が建立された。この神殿における礼拝は、詩編による讃美、律法の

朗読、信仰告白、祈り、祝福、犠牲の藩祭であった。BC 587年エルサレムが陥落すると、人々は外国へ散らされてシナゴグでの礼拝を始めた。この礼拝は、ラビを中心として律法と預言書の朗読、説教、祈り、讃美からなる簡素な礼拝となった。国の滅びたイスラエル人には、神殿で行われた過ぎ越しの祭りなどは家庭での讃美と感謝を表す神への礼拝として大きな意味を持つようになった。集会は安息日としての土曜日であった。

2) 新約時代

礼拝「リタージー」の語源はギリシャ語「レイトゥルギア」であり、「ラオス」(人々、民、国民)と「エルゴン」(仕事、働き)の合成語である³⁾。意味は「民のわざ、国民の公務」であった。この「レイトゥルギア」は、新約時代の人々にとって、「参加者全員の共同作業」とキリスト者にとっての「公の出来事」を表す言葉である。

旧約聖書以来の礼拝によって、新約時代に影響を与えてきた。それは、

- ①シナゴグは聖書朗読、説教、祝祷を、
- ②神殿礼拝は詩編の讃美、信仰告白、とりなしの祈りを、
- ③過ぎ越しの祭りなどの食卓祭儀は聖餐式と愛餐会などに集まって食べ物の分かち合いを守っていたと思われる⁴⁾。

場所は定められた家を集会所として一つの家族のように分かち合ったようである。礼拝する時は、ユダヤ教の安息日を避けて、週の初めの日を「主の日」とした。

3) 宗教改革時代から現代

キリスト教のローマ帝国国教化が進むと特定の礼拝専門家としての教皇や司祭の独占となった。1617年ルターの「95ヶ条堤題」を発端として、「万民祭司」という主張をもって信徒の礼拝参加の重要性を訴えた。その結果、

- ①母国語礼拝と母国語聖書の翻訳、
- ②会衆讃美歌や詩編歌の奨励、
- ③説教重視、
- ④礼典の簡素化をもたらした。

近代現代社会における科学技術の進歩は、日常生活の大きな変化をもたらし、キリスト教を私的な、内面的個人的なことからへと追いやることになった。これによって、信仰の個人主義化、「宗教消費主義」化といわれる特徴が表れた。この結果、礼拝に対して会衆者の積極的な礼拝参加を促し、礼拝における共同体意識を育て上げることが現代の課題となっている⁵⁾。

Ⅲ 礼拝とは

1) 礼拝の定義

越川の礼拝の定義は、「礼拝に参加する一人一人が神との出会いに積極的に参加し、御言葉を聞くこと、祈りと讃美によって応答すること、聖餐に与ること、神の福音宣教の器として働くこと、そして一つの主にある交わりを形作っていく状態」⁶⁾である。これを具体的に考察してみる。

2) 礼拝の原理⁷⁾

神を礼拝することとは何を表しているのかを細かく具体的にアバは説明している。

①啓示と応答による礼拝

創世記1：1「初めに、神は天地を創造された。」ように、創造主、神は初めに存在している。この神から私たちへの恵み、救いが与えられている。神がイエス・キリストにおいて私たちに近づいて私たちを愛されたからこそ、私たちもこの恵み、救いに対して「はい、従います」と応答することである。

②霊による礼拝

ヨハネは4：24「神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」と言う。人間の救いの業を、言葉と行為によって表わされるように、礼拝後にはキリストにあって変えられた一人一人となるキリスト者を作り出すことである。

③共同の行為である礼拝

機械文明にどっぷり浸かりこんだ個人は、孤立化となり、教会の構成者である会衆の全体の行為としての礼拝を取り戻すことである。主にある交わりでは、私たちは孤独ではなく、イエスを主とする兄弟姉妹の交わりを持って公の讃美をする事が他の被造物を治める人間の務めでもある。いわば、横のつながりを大切にする意識改革が必要である。

④礼拝と証言

私たちが生を与えられたのは、その目的として、被造物として、創造主なる天地創造の神を讃美することである。具体的には、マルコ12：30—31にあるように、神を愛し、隣り人を自分のように愛すること、つまり、私たちがキリストにあって生かされていることを覚え、隣り人をキリストの弟子とすることである。

3) 礼拝の本質

アレンによれば、礼拝の本質は、神と神の御言葉への応答であり、その応答によって人間は神の絶対的な価値を宣言することである⁸⁾。このことは、英語の「礼拝」は Old English の *weorthscipe* が「価値ありとする」の *worship* 「礼拝する」ことを意味することからも理解できる。私たちの罪を担って代わりに死なれ、私たちのために復活され、私たちのためにもう一度

帰ってこられるキリストに対する信仰の中心にある、バプテスマと愛餐に感謝を持って与る時こそ神を褒め称えることの本质であるといえる。

神の言葉への応答が礼拝であるならば、イエス・キリストが受肉したこの神の言葉には三つの「様式」がある⁹⁾。

①聖書

聖書は、唯一の絶対の永遠なる神が御自分を明らかに現して、天地と人間を造り、その恵みと救いの業を記録したものである。

②説教

アバはキャンベル・モーガンを引用して、

説教とは、神の御座の権威に立脚し、人間の要求に対して発せられる神の恩恵の宣言である。そして、宣言された事柄に対しては、それを聞いた者の側の服従が要求される。

と述べている¹⁰⁾。つまり、神の言葉を預かる者は、その神の言葉を聞いた者が「聖霊」によって「新しく造りかえられ」て、「良い福音」を「使者」として世の中に、「宣べ伝える」ことである。

③聖礼典

越川は、J・ホワイを引用して、「 sacramentとは、行為と言葉と（往々にして）物を含む一定の『しるし』のことである。」と言う¹¹⁾。洗礼は、マタイ28:19による「大宣教命令」に、聖餐は、ルカ22:19や1コリント11:25による「わたしの記念」としての「しるし」である。

IV 礼拝での説教

1) 説教の定義

今橋によれば、「説教が『語られ聞かれるみ言葉』であり、『言語によるパン裂き』」である¹²⁾。言い換えれば、創造主なる神からの人間に対する「問いかけ」であり、神からの「救い」の招きの言葉であるといえよう。その言葉には二つの要素がある。明確な区別は出来ないが、一つは、ケリュグマであり、もう一つはディダケーである¹³⁾。前者は、

- ①預言が成就して、新しいメシアの時代が到来した、
- ②この出来事はイエスの活動・死・復活をとおして起こった、
- ③復活によってイエスは、キリストとして主の右にあげられた、
- ④教会における聖霊の働きは、キリストの現在せる力と栄光のしるしである、
- ⑤キリストは来臨してメシアの時代は完成される、
- ⑥悔い改めへの勧めと罪の赦しの約束があること、を表す。

後者は原始教会において、異教の世界に向かい、宣教をなすと共に、また信徒を倫理的に教え、キリストの身体なる教会を形成するように努めることを表した。

注目すべき点は、説教を語る者と聞く者が説教を通して礼拝に共に参加する出来事であり、説教者と会衆者との共同作業である。どちらから一方的な行為ではなく、説教者も会衆者も共に、生きているイエス・キリストに出会う礼拝の場であることを銘記すべきである。

2) 説教の目的¹⁴⁾

説教のやり方において、神は非常に厳密に規定している。この神の御心にかなう道に外れると大きな問題となって人間の大きな問題となる。パウロはコリントへの手紙やテモテへの手紙によって、

①説教は、優れた言葉や優れた知恵を用いる教えではなく、神の証しを宣べ伝えることである。(1コリント2:1)

②説教は、唯一つの主題、つまり主としてのキリストを証しすることである。(〃 2:2)

③説教は、人間の弱さ、恐怖を強調していること。(〃 2:3)

④説教は、説得力ある知恵の言葉によって行なわれたものではないこと。(〃 2:4)

⑤説教は、人間の持つ信仰が神の力に支えられるためであること。(〃 2:5)

と理解できる。

説教の目的は、知恵を語ることであるが、この世の知恵ではない。強調していることは、「わたしたちが語るのは、隠されていた、神秘としての神の知恵であり、神がわたしたちに栄光を与えるために、世界の始まる前から定めておられたもの」、(1コリント2:6)つまり福音の真理である。パウロは神の知恵の言葉を異邦人に人の知恵ではなく、御霊に教えられたことばを用いて、神から賜った賜物について話したのである。

説教の誤解は、神の計画された目的をサタンが台無しにすることから、説教の反対を受けることになる。神の御言葉が説教されるとき意味のない礼拝になってしまう失敗の二～三を取り上げてみる。

説教壇からは、参加者全員を満足させる説教が話されると考える人々もいるであろう。我々の主であっても、こういう現実離れした目標では、それは失敗であるということである。

説教は人を喜ばせるものであることへの誤解。説教を語るとき、私たちは説教にこの世の知恵が必要だと信じている。しかし、1テサロニケ2:4では「人に喜ばれるためではなく、わたしたちの心を吟味される神に喜んでいただくため」だとしている。

説教は、カリスマ的な個性のある人にスポットライトを当てることへの誤解。説教者が人気あるときのみ説教の効果があると思われる。しかし、パウロは十字架だけが誇るものであると言っている。(ガラテヤ6:14)

3) 説教の分類¹⁵⁾とその長所と短所

礼拝での説教は、講解説教、教理説教、弁証の説教、倫理的説教、主題説教、伝道説教というふうに分類されている。以下にその簡単な説明を述べる。

- ①講解説教は、聖書全体、或いは一部分の組織的講解である。長所は、継続的な聖書の理解ができること、短所は直接的に聖書中心となるから、どうしても退屈な説教となりやすい。
- ②教理説教は、創造論、受肉論、救済論、三一論、終末論などの教理を詳細に解説する。
長所は、まとまりがあり、キリスト教の本質をつかみ易い、しかし、聖書のあちこちを学ぶために聖書の相当な理解を要求される。
- ③弁証論の説教は、哲学的に、キリスト者のもっている希望の何らかの根拠を明らかにする。
長所は、他宗教との対話や教理問答を基に信仰を強めるのに役立つ。欠点は、主観的な宗教を議論をするだけの議論となりやすい。
- ④倫理的説教は、キリスト者のある行動に対して、福音の理のうちにある部分を詳細に解説する。長所は、日常生活からテーマを取り上げやすく、身近な説教となる。欠点は、倫理的な側面に焦点をあてるため、どうしても説教者の弟子に対する論しの説教となり、いかにも「説教くさい」という説教になりやすい。
- ⑤主題説教は、その時代の状況や出来事をテーマとしてキリスト教信仰の光の下で評価しようとする説教である。細目として説明的、例話的、論争的、説得的説教に分類される。強みは、その時代の出来事をテーマとしているので、理解しやすい。欠点は、長い期間をかけて成り立った御言葉の出来事を証しすることなく、今日的な解釈で聖書を評価しやすくなりがちである。
- ⑥伝道説教は、聴衆をキリストにすべてを委ねるという決断的行為にまで導くことを目的とする説教である。強みは未信者としての聴衆が対象であるとはっきりしているので、大胆に御言葉を伝えやすい。一方、弱みは、信者と未信者が聴衆者になっているので、未信者とのギャップが大きくなりやすい。

4) 良い説教、悪い説教

説教には良い説教と悪い説教がある。どのような説教であろうか。その基準を考えてみる。まず第一に、平易で理解しやすいかどうか判断の基準である。語られる語彙だけでなく、全体の構成が明瞭で、論点がはっきりしていること、つまり知的によく理解されることが必要である。

第二には、聖霊に満たされて力があるかどうか基準となる。これは説教を聴くことによって会衆は、心を動かされてイエスの教えを実践できるようになる力が与えられることを意味する。キリストを解き明かすことは、キリストの名においてその救いを宣言することである¹⁶⁾。キリストこそ「道であり」、「真理であり」、「いのちである」。救いはイエスの人格と業によってもた

らされるのである。この福音を聞いて信ずるものだけがイエスを「主」として告白できるのである。この告白こそ決断であり、説教者が聞く人に、「キリストとは誰であるか」と問いかけ、その問いかけに対して、「私の救い主である」と告白する決断を促す説教は力があると言える。聖書にはこのような聖霊の力が働いているので、人間の力ではなく、御言葉が明らかにされることによって力が出てくるのである。そのためには説教者が聖書の釈義が充分に出来て、キリスト教の教義の知識が充分にあることが必要である。

第三には、美しさがあるかどうかである。この美しさとは、言葉の美辞麗句ではなく、一つのテーマがいくつかの展開を見せながら、それぞれが一致と簡潔な表現を持つこと、その中には聖書の御言葉と矛盾がないことである。

第四には、適度な説教時間を守ることである。130分の礼拝時間であれば、25分（礼拝時間の20%）の説教¹⁷⁾、60分の礼拝時間であれば15分前後の説教というように、バランスの取れた説教時間を用意すべきである。人間の集中力は長くても約20分という限度があるので説教の持つ力がそがれてしまうことになる。

5) 説教の心構え

説教は、福音を語ることである。この説教の持つ意義が理解できれば、説教の際に大切な心構えがあることを注目するべきである。それは、次のようにまとめられる¹⁸⁾。

- ①声の鍛錬をすること。これは腹式呼吸によって、聞いて心地よい音質を出せるようにする発声練習の鍛錬である。
- ②鈴木によれば品位があり、教養を感じさせる姿勢を保つことが求められている。しかし、日本の説教スタイルは余りにも静的である。もっと感情を表に出して、イエスの教えのようにもっとダイナミックに、目をつぶっていてもドラマのように浮かび上がるような説教をするべきではなかろうか。
- ③顔の表情を自然に出すこと。語る言葉は感情を伴うが、感情の赴くままということではない。「感情を支配せよ、殺してはならない」が、これも日本人牧師に共通している点である。もっと感情豊かな表情でもって語ることが効果的ではなかろうか。
- ④説教には、牧師の個人的な家族の話はもっと入れてもよいであろう。模範となる牧師の生活態度を見せることによって、信徒たちもそうなるような教育・訓練をすることに役立つ。説教は、神に栄光を帰するためのものであることを牧師から率先垂範である。
- ⑤「人に聞かせるゴールデン・ルールは、常に聞くに値することを語ることである。」
- ⑥教会員のことを例話として話さないように、又牧会上知り得た人々の守秘すべき話は、説教の中では絶対に話さないこと、
- ⑦最も大切な事は、説教者が大きな笑顔を作り、聖霊に満たされていることを表情で表現するこ

とである。神の御言葉を取り継ぐことほど大切な事はない。「明日と言う日はもう二度とやってこない、今ここで決断をしてほしい」という思いを込めて説教することが求められている。堅苦しい顔つきや原稿を読み上げるような説教では御言葉を取り継ぐことはできない。

6) 意味ある説教とするために

礼拝は説教を語る者と聞く者との共同作業であると述べた。しかし、この説教が種となって根付くには、聞く会衆の態度も問題としなければならない。それは、説教を教会で聞くだけでどのように受け止められたかを考えないと、共同作業とならない。そのために三つのことが考慮されなければならない¹⁹⁾。一つには、聞く耳を持つ者は注意して聞くべきである。なぜならサタンはいつでも説教を聞くことにあらゆる妨害を企てているからである。(マルコ4:24) スピーチと説教は、共に語ることによるコミュニケーションという共通点がある。初めの2分によって会衆者の心を捉えるような導入部を意図的に造り上げることが必要である。二つ目には、会衆は教えられたことを学ぶことに応用しなければならない。説教がひとたび伝えられたならば、その説教を受け入れ、御言葉の教えから習うことが身に付かなければならない。説教が終わった後に、一人一人が「私の信仰は御言葉によってどのように新しく変えられたか」などと問いただすことが必要である。(ネヘミヤ8:5-8) 三つ目には、会衆は聞いた説教と聖書の御言葉を理解して、自分たちの人生にどのように応用させるかを考えなければならない。礼拝に参加したすべての会衆から神への応答を求める説教が語られなければならない。(使徒13:45-48)

V 結論

礼拝における説教は、例えると、中身はキリスト教という信仰であり、これは世界共通である。人や国によって違うのは、その信仰を入れる容器である。よって小さい子どもであれば哺乳瓶で信仰を与え、若者であればITなどをテーマにした信仰であり、年配者であれば、ガンとかリストラなどの社会現象を通した信仰の説教を考えるべきである。

礼拝における説教は全知全能の神への人間の絶対的価値を置く礼拝の実践である。この説教は創造主、神に焦点を合わせることであり、神の御言葉は人間の救いを目的としている。この意味において、聖書中心の説教は二つの重要な点を成就するであろう。それは、神が讃美されること(コロサイ3:17)、人が十分に整えられた者となること(2テモテ3:16-17)である。

註

1. 今橋朗、『礼拝を豊かに：対話と参与』、日本キリスト教団出版局、2002年、pp.18-21.
2. 聖書の創世記と出エジプト記.
3. 今橋朗、前掲書、pp.14-17.
4. 前掲書、pp.32-33.
5. 越川弘英、『今、礼拝を考える：ドラマ・リタジー・共同体』、キリスト新聞社、2005年、pp.94-97.
6. 越川宏英、前掲書、p.90.
7. レイモンド・アバ、『礼拝：その本質と実際』、(滝沢陽一 訳)、日本キリスト教団出版局、2002年 p.11-22.
8. ロナルド・アレン、ゴードン・ボロー、『よりよい礼拝をささげるには』、(富井悠夫 訳)、聖書図書刊行会、1989年、p.21.
9. レイモンド・アバ、前掲書、p.60.
10. レイモンド・アバ、前掲書、p.78.
11. 越川宏英、前掲書、p.196.
12. 今橋朗、前掲書、p.81.
13. キリスト教大事典、改定新版、教文館、1989年.
14. John Kachelman, Jr., Making Worship, <http://www.greatoaks.org/articles/Worship>
15. レイモンド・アバ、前掲書、p.85.
16. レイモンド・アバ、前掲書、p.89.
17. 北島靖士、「三鷹バプテスト教会礼拝式辞」東京バプテスト神学校、礼拝学Ⅱの講義での配布資料、2006年.
18. 鈴木崇巨、『牧師の仕事』、教文館、2005年、pp.109-115.
19. John MacArthur, Jr., Rediscovering Expository Preaching (Grand Rapids: W Publishing Group, 1992), pp.102-105.